

皮膚科のトリビア

253

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第41回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和7年4月5日

スキンフレイルの評価と活用

皮膚の加齢変化と全身のフレイルの関連性を調査した。関東のクリニックに通院する65歳以上の男女701名を対象とし、医師が写真付き基準を用い、①皮膚乾燥、②痒み、③老人性紫斑、④足爪病変、⑤皮膚萎縮の5つの皮膚症状を4段階で評価した。全身のフレイル評価は厚生労働省の「基本チェックリスト(KCL)」を利用した。

フレイルとの有意な関連があった皮膚症状は、「老人性紫斑」と「皮膚萎縮」の2項目であった。また5つの皮膚症状の合計点とフレイルスコアの間にも、弱い正の相関が認められた。「皮膚乾燥」「痒み」「足爪病変」は単独での相関がみられなかった。

一言コメント

「これらの5項目をスキンフレイルと定義して、全身性フレイルリスクとの関連を検討した。介護リスクの評価にも用いられるよう、さらに縦断的な調査を継続していきたい。」

●第41回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和7年4月6日

皮膚科でもできそうな
足趾屈腱切除

ハンマートゥなど明らかな関節の変形が誘引となっている鶏眼、胼胝では足趾の屈曲変形に対する

手術が必要な場合がある。足趾屈腱切除は足趾の不適切なアライメントを矯正するために行われる。施術法はむずかしくなく、局麻下に切離が必要な腱を18Gの針でザクザクと切ればよい。

一言コメント

「削っても再発しやすい関節変形のある患者は多いが、足趾のアライメント是正を整形外科医に紹介することは少ない。簡単な手技であれば皮膚科でも対応するのがよさそうだが、そうはいつでも、第一歩を踏み出すには整形外科医の協力が必要だ。」

●第41回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和7年4月6日

HPV 7は湿っぽい場所を好む

human papillomavirus (HPV) 7が検出される疣贅は、湿潤環境に生じやすい特徴がある。HPV7が最初に検出されたのは食肉処理業者に特有の手足のイボ(Butcher's warts)である。また足趾間の難治性イボ(warts in toe webs)からも検出され、このタイプはほぼ男性にのみ生じている。また、免疫抑制状態にある小児の肛門部や鼠径部のコンジローマからもHPV7が検出されることがある。

一言コメント

「尖圭コンジローマから検出されるウイルスはHPV6、HPV11が主流で、HPV7はめったにないらしい。趾間のイボが男性だけにみられるというのも不思議である。」

●第41回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会から

令和7年4月6日

スピノサドはアタマジラミ、疥癬の虫卵にも有効

スピノサドは、アタマジラミ症の治療に用いられる局所製剤であり、ペルメトリン耐性のアタマジラミにも有効性を示す。スピノサド0.9%懸濁液は、昆虫のニコチン性アセチルコリン受容体に作用し、神経を過剰に興奮させることでアタマジラミを麻痺させ、死に至らせる。卵にも殺卵作用を示すため、駆除効果が高い。スピノサドクリームリンスは乾いた髪に頭皮から毛先まで塗布し、10分後に洗い流す。1回の治療で十分な効果が得られることが多く、2つの臨床試験では、スピノサド群で84.6%および86.7%の有効性が認められたのに対し、ペルメトリン群では44.9%および42.9%であった。

疥癬に対しても1回の塗布後6時間放置で、78.1%が改善した。

一言コメント

「1回だけの使用でアタマジラミも疥癬も8割に有効ということは確かに殺卵効果もあるのだろう。日本でも使用できるようになるとよい。ちなみに日本のフェノトリン耐性アタマジラミにはジメチコン製剤であるアースシラミとりローションプレミアムタイプが用いられている。」

●日本皮膚科学会第916回東京地方会から

令和7年5月17日

カルメロースナトリウムによるケナコルトA注射後のアナフィラキシー

60歳代女性、腱鞘炎のためケナコルトAの局注を受けた後、アナフィラキシーを発症した。成分プリックテストを施行、カルメロースナトリウムで陽性、ポリソルベート80は陰性。

カルメロースナトリウムはセルロースを原料とし、日本薬局方に適合した増粘安定剤で、医薬用では、キシロカインゼリーやフロリドゲルなどに使用されていて、アイスクリームなどの食品添加物としても実績がある。これまでの報告例は女性に多く、ハンドクリームなどの化粧品による経皮感作が疑われる。

一言コメント

「PMDAの添付文書検索で組成を調べてみた。なんと877種類の錠剤、シロップ、ドライシロップなどに使われていた。食品も含めて指導が大変だと思った。」

●第73回神奈川医真菌研究会から

令和7年6月7日

ネイリンによる臨床検査上の副反応のまとめ

国内第Ⅲ相のデータから、ネイリン内服による肝機能検査異常値は17例に生じ、AST増加が9例、ALT増加が8例、 γ -GTP増加が16例(うち γ -GTP増加のみが8例)、ALP増加が2例であった。発現時期の中央値はALTが8.0週、ASTが8.4週、 γ -GTPが6.0週、ALPが8.1週であった。いずれも検査値上昇に伴う臨床症状はなく、12週の投与完了が8例、中止が9例で、全例で回復している。 γ -GTPのみ上昇するタイプはネイリン代謝にグルタチオン抱合が関与しているが、その際に γ -GTPが誘導されると考えられる。3項目がすべて上昇するタイプではネイリンによる肝細胞障害が発生している可能性がある。

一言コメント

「投与後6～8週後に採血を行い、 γ -GTPのみの増加であればそのまま投与を継続してもよい。AST、ALTが基準値以上100以下であれば、2～4週後に再度採血を行い、100以下であればそのまま12週の内服を継続。AST、ALTが100以上であれば、いったん休薬し、正常値に戻ったときに再投与を検討、というアルゴリズムが示された。また、投与4週後に血中クレアチニン値が一時的に上昇している例もあり、40%以上の上昇があれば投与中止、休薬を検討することが推奨されている。」